

加納城跡の発掘

発掘22年の成果



加納城跡の発掘 平成22年3月

発行 岐阜市教育委員会
(財)岐阜市教育文化振興事業団



地理的環境

加納城跡の発掘 発掘22年の成果

昭和58年加納城跡本丸が国の史跡に指定されたのを受け、昭和63年度から史跡整備のための発掘調査を実施してきました。発掘調査の成果は、地元市民団体等との協働で、現場見学会・報告会などを開催し、随時公開してきました。また平成14年度には発掘調査報告書『史跡加納城跡』、さらに平成21年度には『史跡加納城跡2』を刊行しました。

22年間の発掘調査では、多くの成果がありましたが、発掘調査によって明らかとなった新事実や伝承されていたことの物証など、特に重要な成果を、本冊子でご紹介します。加納城の本来の姿を垣間見て頂ければ幸いです。

岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団



▲加納城跡の航空写真に堀を復元(南から)

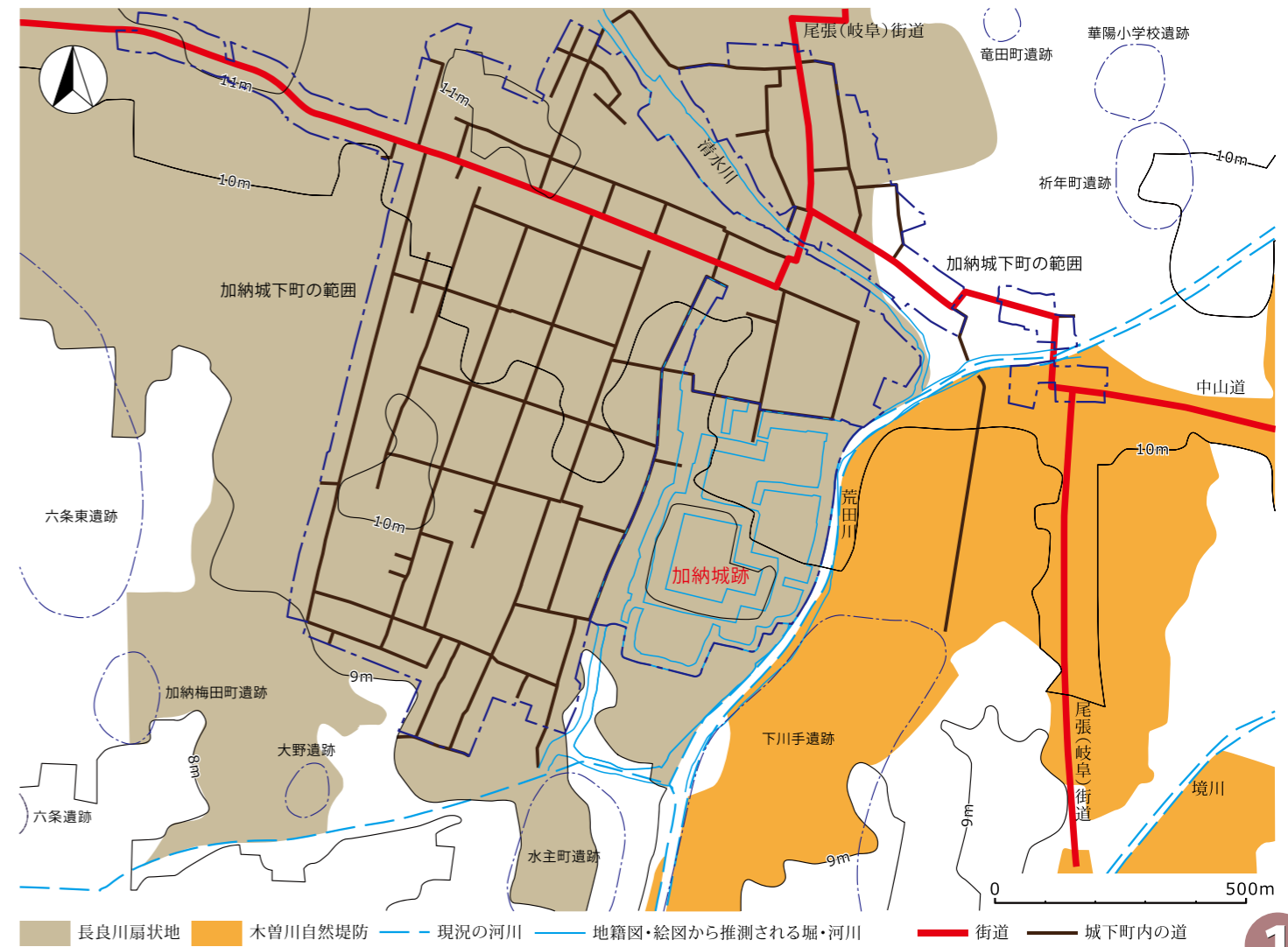
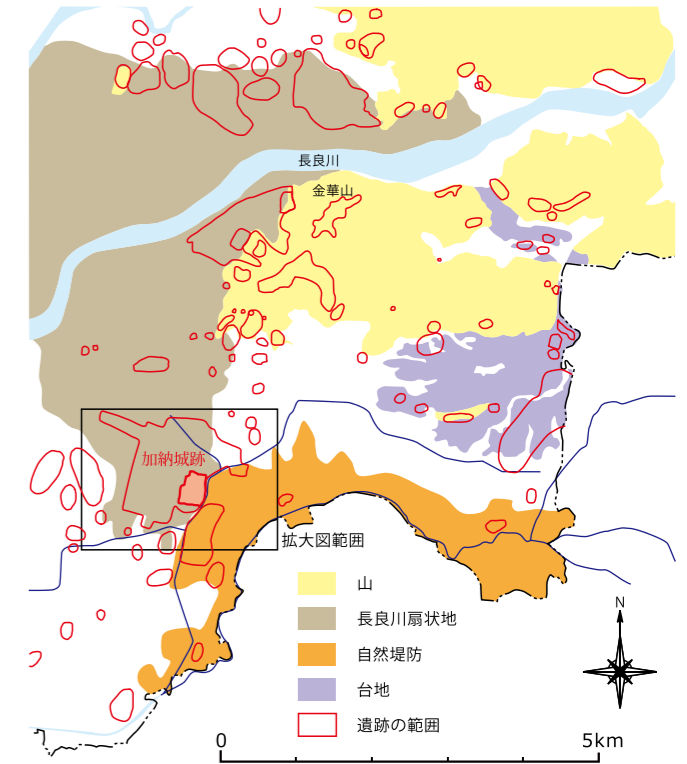
Contents

- 地理的環境
- 加納城の歴史と構造
- 発掘調査の歩み
- 中世加納城
- 本丸大手枡形の発掘
- 障子堀の発見
- 本丸御殿と火災の痕跡
- 二の丸御殿と食生活
- 出土品

山地を流れてきた長良川は、岐阜市内で濃尾平野に出ると、広範囲に扇状地を形成します。左岸の扇状地の扇頂の標高は約20m、扇端の標高は約9mを測り、比高差10m以上に及びます。加納城は長良川扇状地の南東末端に立地しています。隣接する荒田川の東は、境川(旧木曾川)によって形成された自然堤防域で、地形分類上の境目にあたります。

加納城の縄張りに大きく影響しているのは、荒田川とその支流の清水川です。江戸時代の絵図を見ると、元来荒田川は、扇状地の裾に沿うように西進して長良川に合流するのが本流だったようです。

城域は、北に清水川、東と南に荒田川と、三方が川に囲まれています。さらに西には長刀堀が掘られ、さしずめ水に浮かぶ城という景観を呈していたようです。



加納城の歴史と構造

加納城の歴史

加納城は関ヶ原戦後の慶長6年(1601)、大坂方への備えのため、徳川家康が自ら現地を見分し、翌年から築城が開始されたといわれています。その場所は、戦国時代の城館跡(中世加納城)でした。

中世加納城は、文安2年(1445)、美濃国守護代斎藤利永によって築城されたといわれています。守護土岐氏の居館革手城(下川手遺跡)の近接地でした。明応4年(1495)、土岐氏の後継争いに端を発する船田合戦が勃発しますが、その様子を描いた『船田戦記』に「合戦の際加納城を改修した」との記述があります。16世紀初め頃、土岐氏による「福光」(岐阜市福光周辺)への守護所の移転を契機に衰退が始まると見られますが、天文7年(1538)頃に廃城となったともいわれます。

近世加納城の初代城主は、家康の娘亀姫の婿である奥平信昌で、3代続いた後、大久保氏1代、戸田(松平)氏3代、安藤氏3代、永井氏6代の譜代大名が歴代の城主を勤め、明治を迎えます。石高は当初10万石ありましたが、徐々に減らし、最終的には3万2千石になりました。

享保13年(1728)には、加納城下の大半を焼失する大火が発生しています。火災は城内にも及び、岐阜城を移築したとされる二の丸北東にあった御三階櫓が焼失しました。

明治5・6年(1872・1873)、城内の建物は全て取り壊されます。堀は明治から昭和にかけて埋められてしまいました。昭和14年(1939)、本丸内に旧陸軍が駐屯し、戦後は昭和50年(1975)まで自衛隊が使用していました。

加納城歴代城主	【奥平】 信昌 - 忠政 - 忠隆(廃嫡)	【安藤】 (備中松山より) 信友 - 信尹 - 信成(磐城平へ)
	【大久保】 (小田原より) 忠職(明石へ)	【永井】 (武蔵岩槻より) 尚陳 - 尚備 - 尚旧 - 尚佐 - 尚典 - 尚服
	【戸田】 (明石より) 光重 - 光永 - 光瀧(山城淀へ)	



◀自衛隊駐屯時代の本丸跡



現在の加納城跡▶

加納城の構造

今の加納城は、全ての堀が埋められており、わずかに本丸とごく一部の土塁・石垣に当時の姿を偲ぶことができます。現在の状況から、江戸時代の縄張りを復元することは困難ですが、明治22年(1889)に作成された地図を参考にして、発掘調査結果を踏まえて推定したのが4ページの図です。過去の調査結果と照らし合わせて見ても、堀と石垣に関しては、細部までほぼ正確に反

映しているといえそうですが、土塁部分は復元困難な部分が多く、今後の調査の進展によって変更する可能性があります。

縄張り図を見ると、南北約550m、東西約400mの範囲を川と堀に囲まれた平城といえます。城域の北端から約200m北の中山道に面して大手が設けられていました。曲輪は、北から三の丸、厩曲輪、二の丸、本丸を東西に2つずつ、互い違いに配され、さらに本丸南の大藪曲輪を合わせて、全部で5つの曲輪から構成されていました。加えて三の丸の前には、鍵形に折れた堀と土塁による入口施設がありました。

本丸は東に突出する凸字形をしているのが特徴的で、これは出柵形(外柵形)と呼ばれる防御施設を設けたものです。この形状は初期徳川系城郭の特徴であるとして、「加納城型」とも呼称されています。出柵形の部分を除く本丸本体の大きさは、南北160m、東西120mの長方形で、二の丸の大きさとほぼ等しくなっています。また三の丸、厩曲輪は一辺100m前後の正方形で、ほぼ同規模です。加納城は戦国期の城館跡を利用して築かれていますが、縄張り自体、中世加納城の遺構に強く規制されている可能性があります。

城内の様子は、江戸時代の複数の絵図によって、ある程度は分かります。本丸内は、北西角に天守台が備えられていますが、天守自体が描かれているものではありません。また本丸内部も番屋等小規模な建物以外、描かれたものではありません。櫓は、本丸に4棟、二の丸に4棟、三の丸・厩曲輪に各1棟の計10棟が、土塁の上に建てられていました。その内、二の丸北東角(現在岐阜地方気象台)には、享保13年(1728)に焼失するまで、岐阜城の天守を移築したとされる唯一の三層の隅櫓「御三階櫓」がありました。

二の丸御殿を描く絵図は複数あり、幾度かの建て替えがあったようです。

加納城の現存石垣

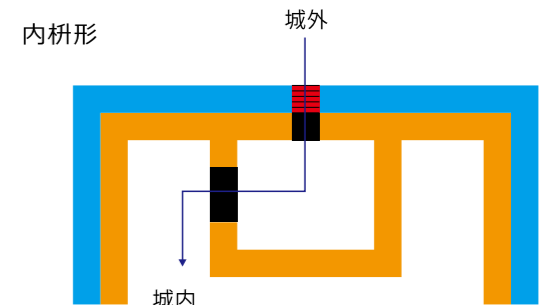
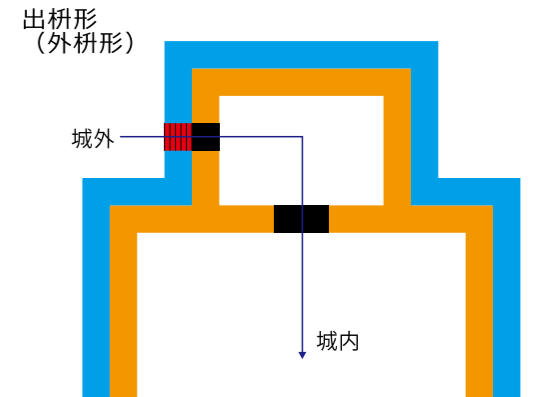


◀本丸北東角の石垣



◀三の丸北辺の石垣

曲輪
堀や土塁、石垣などで囲まれた城の中の空間のこと。防御のため、城は複数の曲輪で造られている。本丸、二の丸など。



- 堀
- 土塁
- 門
- 橋

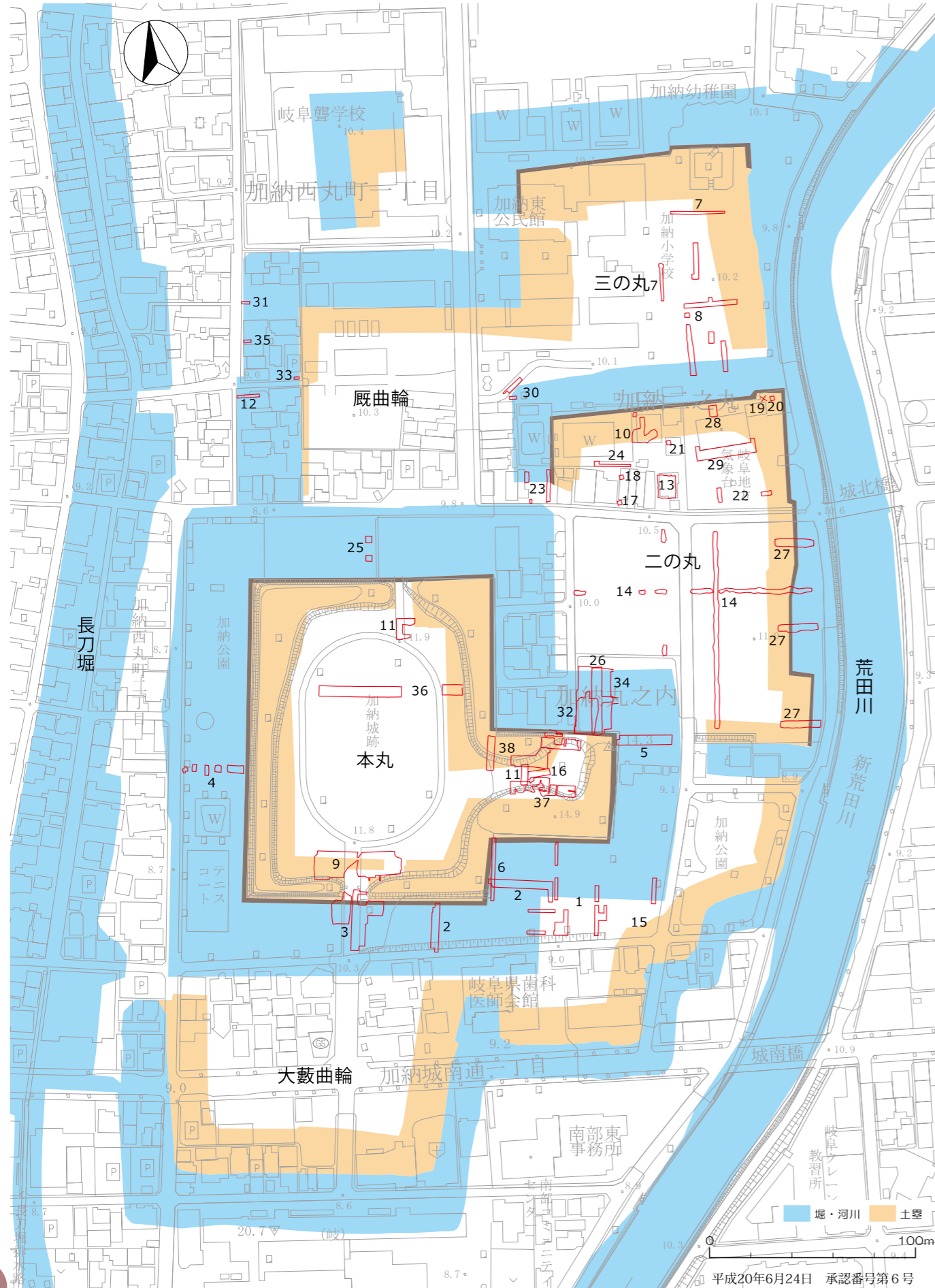


▲二の丸北辺の石垣

発掘調査の歩み

本丸では、昭和58年に国の史跡に指定されたのを受け、昭和63年度から史跡整備のための発掘調査を実施してきました。また二の丸では遺跡の状況を確認するための調査や、三の丸・厩曲輪で開発に伴う緊急調査を行い、平成20年度までに38件を数えます。

これら発掘調査で得られた成果は大きく、中には新しい発見もありました。



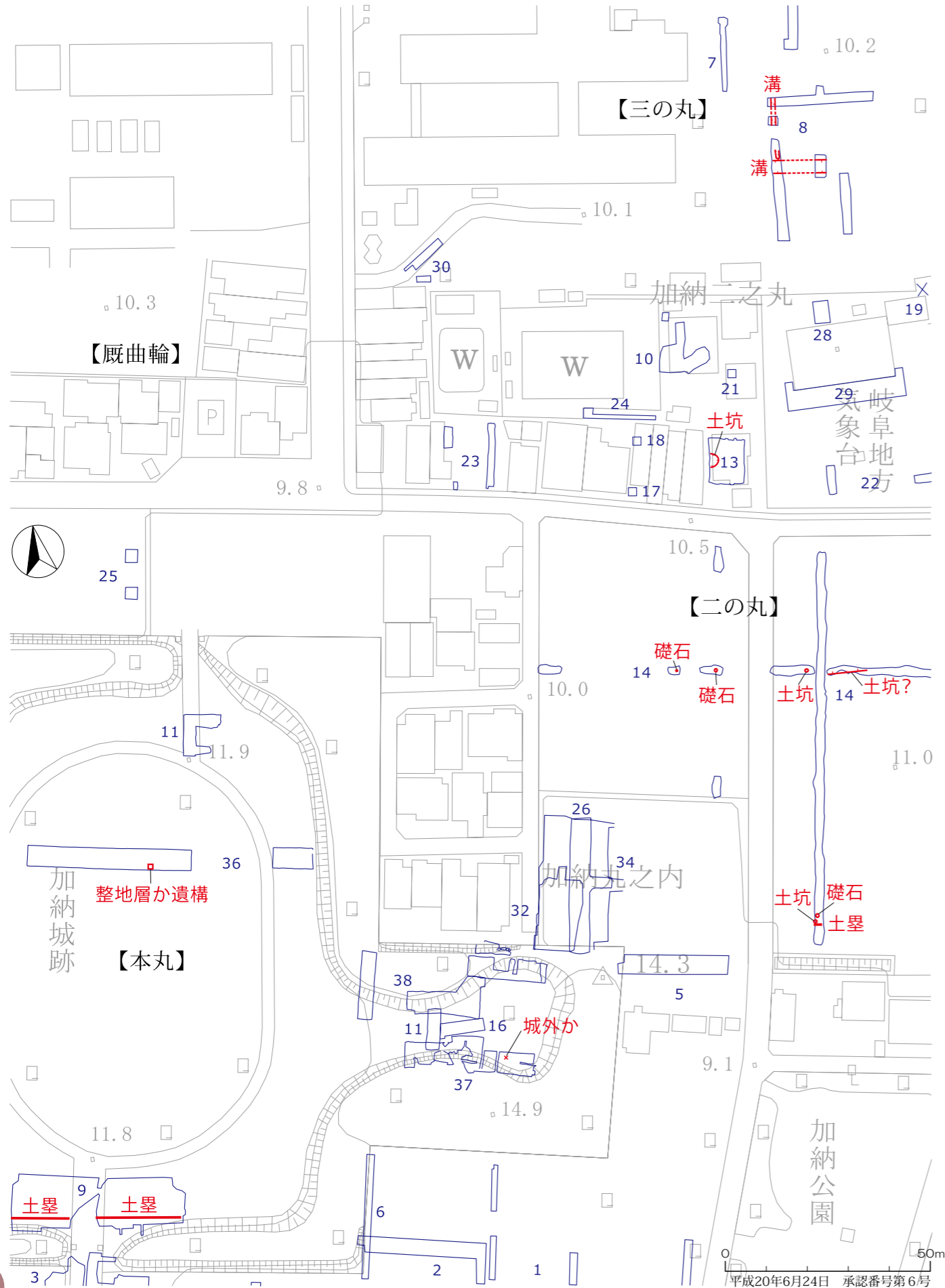
加納城跡発掘調査調査履歴

地点	年度	調査地	回数	面積(m ²)	目的	主な遺構	報告書
1	昭和50	本丸南東堀		216		堀	①
2	昭和63	本丸南東堀	本丸1次	213	史跡整備	堀	⑥
3	平成元～2	本丸南堀	本丸2次	260	史跡整備	堀・石列状遺構・瓦集積	⑥
4	平成2	本丸西堀	本丸3次	140	史跡整備	堀	⑥
5	平成4	本丸東堀	本丸4次	117	史跡整備	堀	⑥
6	平成6	本丸南東堀	本丸5次	60	史跡整備		⑥
7	平成7	三の丸	三の丸1次	54	緊急調査		②
8	平成8	三の丸	三の丸2次	223	緊急調査	堀・石垣・井戸・戦国区画溝	③
9	平成11	本丸南門	本丸6次	530	史跡整備	桁形・石垣・戦国土塁	⑥
10	平成12	二の丸	二の丸1次	44	緊急調査	土塁・石列	④
11	平成12	本丸北門 本丸大手桁形	本丸7次	55 30	史跡整備		⑥
12	平成12	厩曲輪	試掘	5	緊急調査	堀	⑤
13	平成12	二の丸	二の丸2次	84	緊急調査	礎石建物・土坑など	⑧
14	平成13	二の丸	二の丸3次	385	確認調査	土塁・石垣・戦国土塁・戦国礎石など	⑤
15	平成13	本丸南東堀外	工事立会				⑤
16	平成13	本丸大手桁形	本丸8次	30	史跡整備		⑥
17	平成13	二の丸	試掘	3	緊急調査		⑦
18	平成13	二の丸	工事立会				⑦
19	平成13	二の丸	工事立会				⑦
20	平成13	二の丸	試掘	1	緊急調査	土塁	⑦
21	平成14	二の丸	工事立会				⑦
22	平成14	二の丸	二の丸4次	22	確認調査	土塁	⑦
23	平成14	二の丸	二の丸5次	34	確認調査	石垣・堀	⑧
24	平成14	二の丸	工事立会			井戸・礎石	⑧
25	平成15	本丸北堀	試掘	18	緊急調査	堀	⑫
26	平成15	本丸大手北堀	本丸9次	160	史跡整備	堀・瓦集積	⑫
27	平成15	二の丸	二の丸6次	195	確認調査	石垣・土塁	⑨
28	平成15	二の丸	試掘	9	緊急調査	土塁	⑨
29	平成15	二の丸	工事立会				⑨
30	平成15	二の丸	二の丸7次	23	確認調査	堀	⑨
31	平成15	厩曲輪	試掘	4	緊急調査	堀	⑨
32	平成16	本丸大手北堀	本丸10次	140	史跡整備	障子堀・瓦集積・盛土状遺構	⑫
33	平成17	厩曲輪	試掘	3	緊急調査	堀・テラス面	⑩
34	平成17	本丸大手北堀	本丸11次	600	史跡整備	障子堀・瓦集積	⑫
35	平成17	厩曲輪	試掘	5	緊急調査	堀	⑪
36	平成18	本丸内	本丸12次	250	史跡整備	土塁	⑫
37	平成19	本丸大手桁形	本丸13次	250	史跡整備	土塁・石垣・礎石・瓦集積	⑫
38	平成20	本丸大手桁形	本丸14次	240	史跡整備	石垣・階段状遺構	⑫

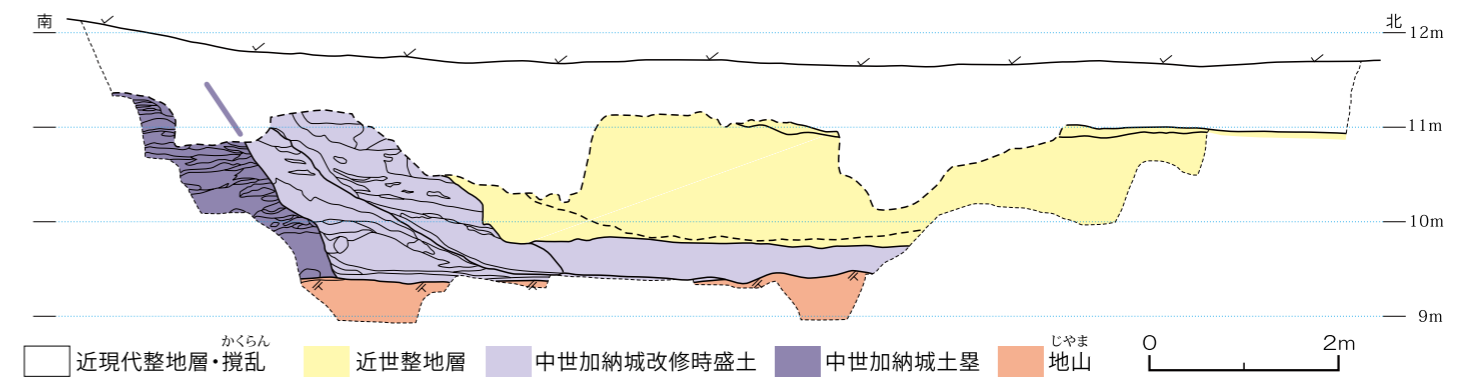
報告書一覧

- ①『岐阜市埋蔵文化財発掘調査報告書』 1985 岐阜市教育委員会
- ②『平成7年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 1996 岐阜市教育委員会
- ③『平成8年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 1997 岐阜市教育委員会
- ④『平成11・12年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2001 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
- ⑤『平成12・12年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2002 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
- ⑥『史跡加納城跡』 2003 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
- ⑦『平成13・14年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2003 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
- ⑧『平成12・14・15年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2004 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
- ⑨『平成15・16年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2005 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
- ⑩『平成16・17年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2006 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
- ⑪『平成17・18年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 2007 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団
- ⑫『史跡加納城跡2』 2010 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団

中世加納城



9地点(中世加納城土塁・本丸南辺)断面図



▲上の図の中世加納城土塁部分

平成11年度の調査(9地点)で、中世加納城の土塁が見つかりました。近世加納城本丸南辺の土塁に沿う位置で、戦国時代の城館(中世加納城)の土塁を利用して、近世加納城が築かれていることが明らかとなりました。

江戸時代に記された書物に、中世加納城の場所に近世加納城が造られたと書かれていますが、それを裏付ける物証の発見であり、発掘調査の真骨頂ともいえることでした。

二の丸跡(14地点)の調査で、一部を戦国時代の地面まで掘り下げたところ、建物の柱を支える基礎石—礎石—が見つかりました。扁平な川原石の平らな面を上にしており、直径30~40cmの大きさがあります。

戦国時代の地面までは、ごく一部の範囲しか掘っていないため、建物の大きさを推測することはできませんが、3箇所で見つかり、多くの建物があったようです。



▲戦国時代の礎石(二の丸)

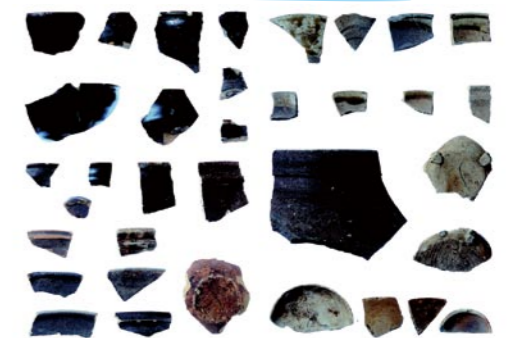


▲戦国時代の区画溝(三の丸)

三の丸跡(8地点)の調査では、戦国時代の区画溝が見つかりました。区画溝とは、屋敷地などを区画する溝で、中には多量の土師器皿(かわらけ)が捨てられていました。

土師器皿は盃として用いられる使い捨ての皿で、中世加納城周辺に建てられた屋敷で、宴会が行われていた痕跡かも知れません。

中世加納城に関わる出土品は、圧倒的に土師器皿が多いです。それ以外には、瀬戸で作られた釉薬の掛かった陶器(古瀬戸)の天目茶碗、皿、播鉢や、東濃地方で作られた釉薬の掛からない(山茶碗)碗、皿などがあります。



▲戦国時代の遺物

本丸大手枡形の発掘

枡形は通常、外側の高麗門こうらいもんと内側の櫓門やぐらもんという2棟の門と四角形の広場で構成されます。平成12・13・19・20年度の発掘調査で、櫓門の位置と大きさ、及び広場の大きさが判明しました。



上の写真は、櫓門やぐらもんに接続する土塁SA12どるいです。土塁の裾は石垣さかんで補強されています。石垣は、この部分だけ砂岩という種類の石だけで造られています。砂岩は綺麗に平らに割れるため、本丸大手の門の美観を意識したものではないでしょうか。

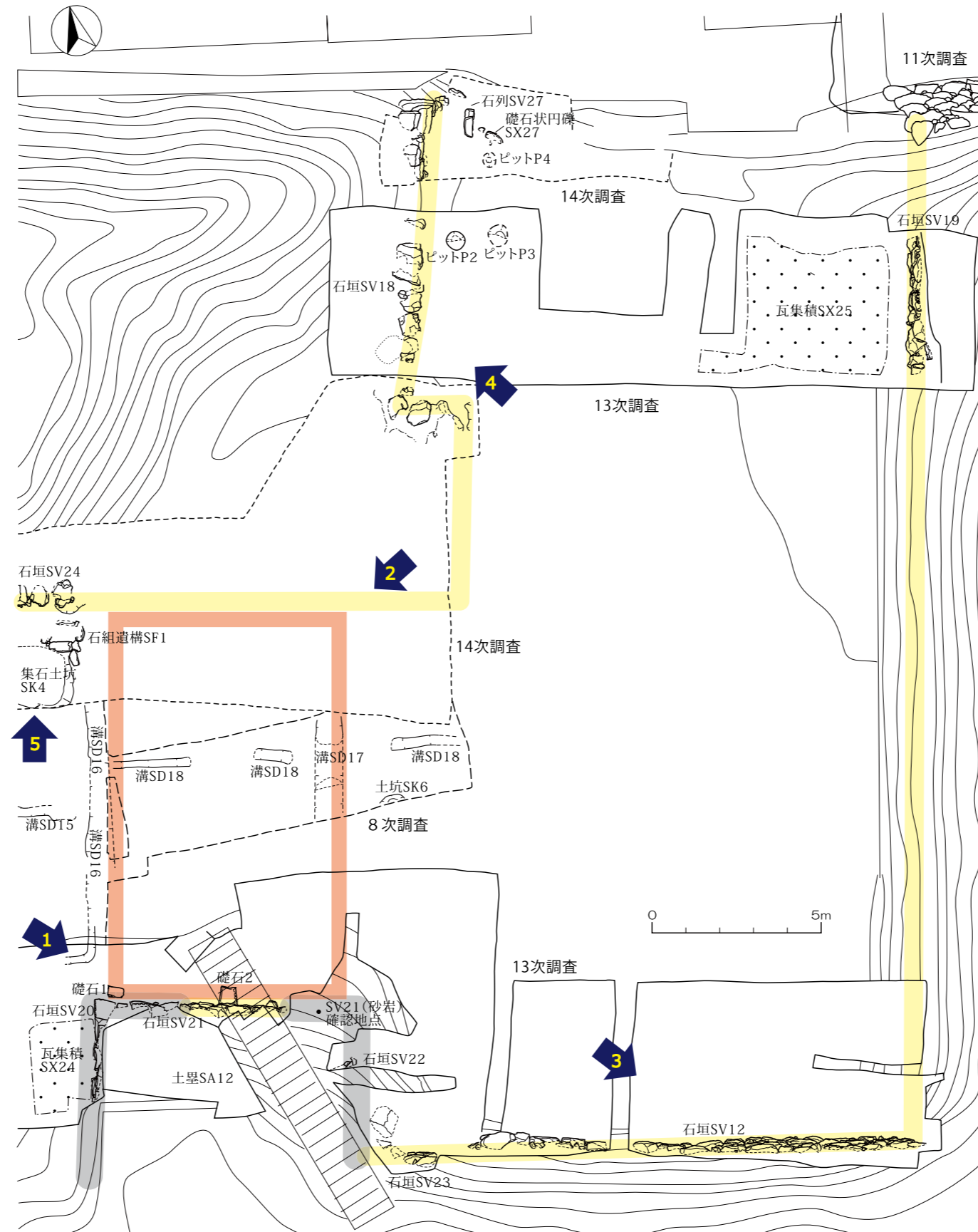
写真中の矢印が櫓門の礎石そせきです。櫓門は1階が門、2階が櫓になっており、櫓本体は土塁の上ののっていました。礎石は櫓本体の柱を支えるもので、石垣同様砂岩を使用しています。写真の手前の礎石は30×45cm、奥の礎石は45cm四方の大きさがあります。

礎石の間隔は3.3mあり、この倍の6.6mが櫓門の東西の大きさと推定できます。また発掘調査の結果や絵図から推定すると南北の大きさは11.0mと考えられます。

櫓門北西角には石を「口」字形に組んだ石組遺構SF1が出土しました。櫓門や雨落溝と見られる溝SD16との位置関係から雨水を溜める集水枡あまおちみぞと考えられます。



▲絵図から推測した櫓門の柱の位置



櫓門推定位置
 石垣推定ライン(チャート)
 石垣推定ライン(砂岩)



ますがたますがたの枡形の南辺を構成する石垣SV12です。大部分がチャートという石を使っています。石垣SV23と合わせて、推定の長さは17mになります。



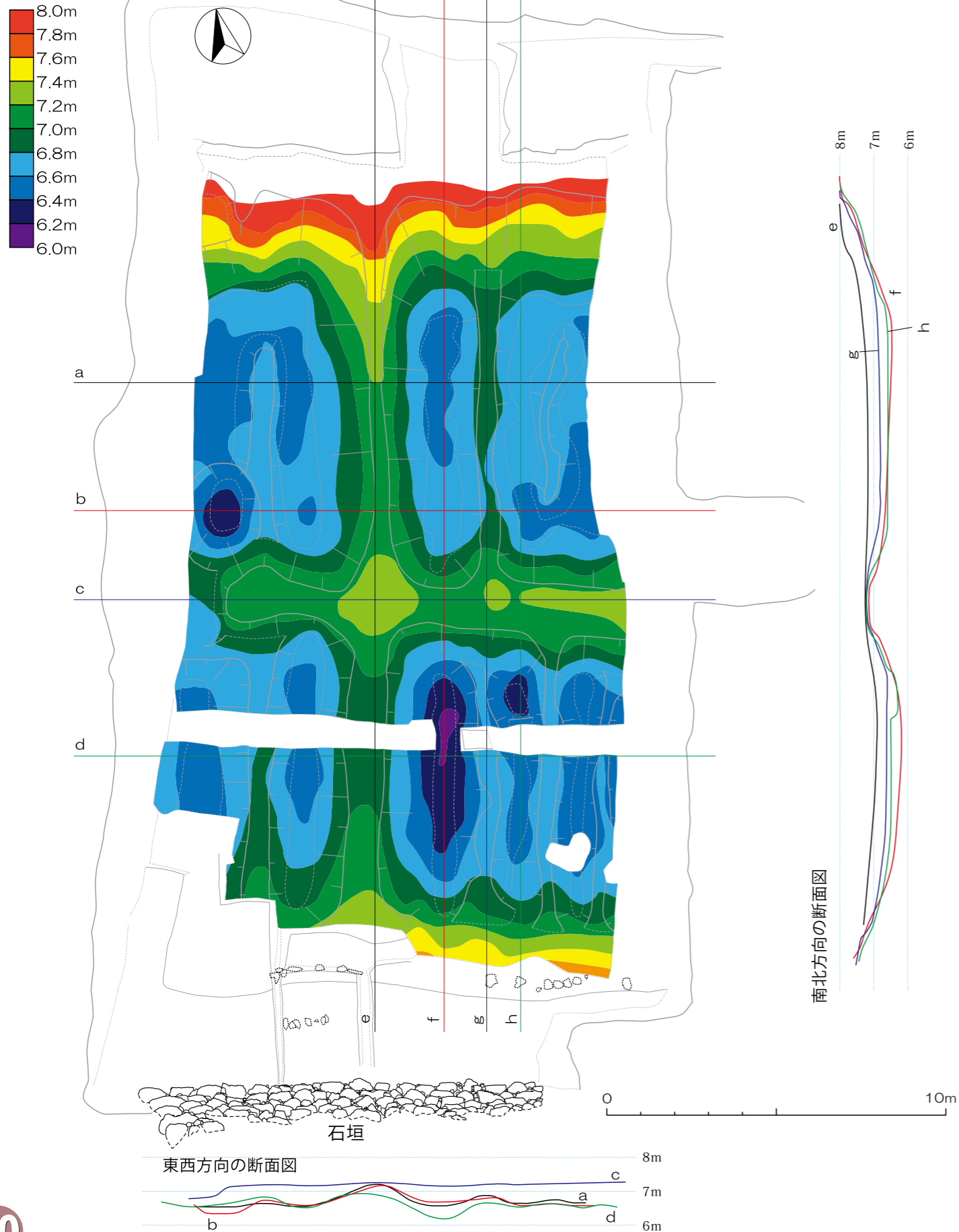
枡形の入口脇の石垣です。枡形外側の門である高麗門こうらいもんがあったと推測する場所ですが、痕跡は見つかっていません。

この石垣は、クランク状に屈曲することが14次調査で分かりました。絵図では見ることでできない構造です。



櫓門北の石垣と、集水枡と考えられる石組遺構(写真の黄色の線)です。石垣のこれより東は、明治以降に壊されており残っていません。

障子堀の発見



堀底に畝のような盛り上がり(堀障子)があるものを障子堀といいます。平成16・17年度の調査で加納城本丸が障子堀であることが分かりました。

平成16・17年度の本丸大手北堀の発掘調査で、堀障子が見つかりました。それまで想定されていなかった発見でした。

堀障子とは、堀底に設けられた畝状の盛り上がりあるいは仕切りのことをいい、堀障子のある堀を障子堀といいます。障子堀は関東の戦国大名(後)北条氏の城の特徴とされてきました。堀を渡ろうとする敵軍の行動の自由を妨げるものといわれています。水堀でどれほどの効果があるか分かりませんが、近年の発掘調査で、江戸城の外堀、小倉城、米沢城、大坂城三の丸などで見つかっています。いずれも関ヶ原戦直後、加納城とほぼ同時期に築かれたもので、未だ徳川氏と豊臣氏の対立が続く緊迫した情勢でした。このような状況で採用された障子堀は、軍事的に有効な施設であったかも知れません。



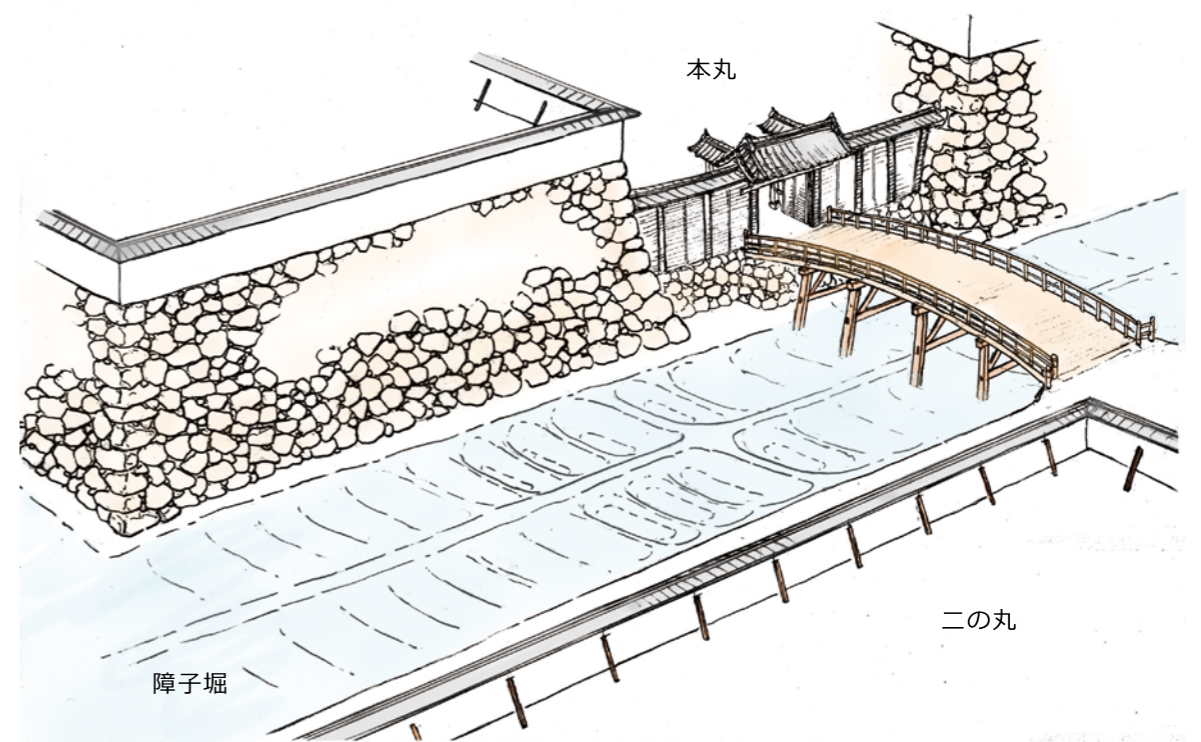
▲発掘された障子堀(北から)

加納城の堀障子は、長良川が運んできた基盤の砂礫を掘り残して造られています。発掘で確認できた堀底の1番深い所と、堀障子の高い所では1.5m程の差がありますが、堀内の堆積物を見ると、堀障子がかかなり崩れていることが分かっているので、元来もっと高低差があったと見られます。また堀障子には大きいものと小さいものがあり、大きい堀障子でパターン化された区画を造っていた可能性があります。



▲発掘された障子堀(南東から)

堀障子の発見後、それ以前に行っていた発掘調査の図面や写真を検討したところ、どうやら本丸を巡る堀は全て障子堀であった可能性が高いことが分かりました。二の丸や三の丸などの状況は不明です。



▲本丸大手北堀周辺のイメージ図(北東から)

本丸御殿と火災の痕跡

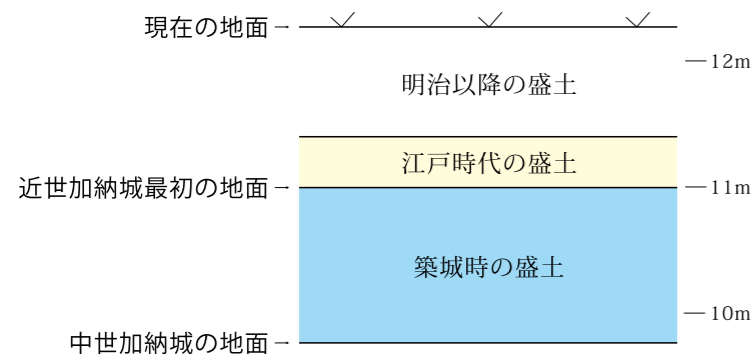
13ページの図は永井氏が城主の頃の本丸内の様子を描いたものです。櫓・多間櫓などが周囲を巡りますが、これらは土塁の上に建てられていたもので、中央の平坦地(現在の広場部分)には何も見当たりません。他の絵図でも同様で、本丸中央部がどのように利用されていたのか不明でした。ところが、平成元年度・18年度の発掘調査で、新たな可能性が出てきました。

平成元年度の調査は、南門外の堀の調査を行いました。現在ここには南門に至る土橋状の通路がありますが、この通路は明治以降に、本丸内から土を運び出し、盛って造っていることが分かりました。この盛土の中には17世紀前半頃の陶器が多量に含まれており、築城当初本丸内に居住施設があったのではないかと推測されました。平成18年度の調査は、本丸内で行ったのですが、この時も同じ時期の陶器が多く出土しました。

初代城主奥平信昌は隠居の際、本丸から二の丸に移ったといわれており、今のところ、状況証拠しかありませんが、築城当初は本丸内に御殿が建てられていた可能性が考えられます。

本丸内の土の堆積は下図のとおりで、本丸御殿が想定される地面は、近世加納城最初の地面と考えられます。17世紀前半のある時期に、御殿が廃され、新たに盛土をしたものと思われます。盛土中には、大量の瓦が入っており、また焼けた壁土のかけらや瓦、炭などが混じることから、本丸内で火災があったことが想定できます。この盛土は本丸枡形でも見られるので、広範囲に焼けてしまったと考えられます。二の丸内では享保13年(1728)の火災など、文献上からもほぼ明らかですが、本丸の火災の記録は現在のところ見つかっておらず、これも発掘調査によって浮かび上がった新事実といえるでしょう。

発掘調査では江戸時代の盛土を掘ることはできないため、御殿そのものの痕跡はまだ見つかっていません。しかし、数々の状況証拠から読み解くと、本丸御殿の存在の可能性は高くなりつつあると思わざるを得ません。



▲本丸内の土層模式図



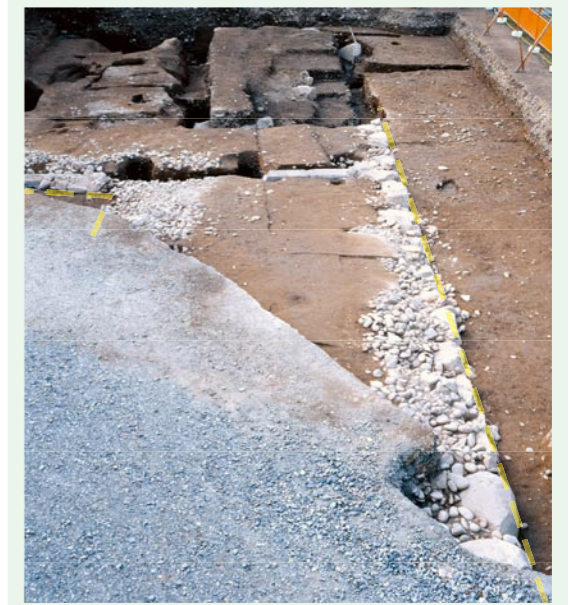
▲平成元年度調査で出土した17世紀前半までの陶器



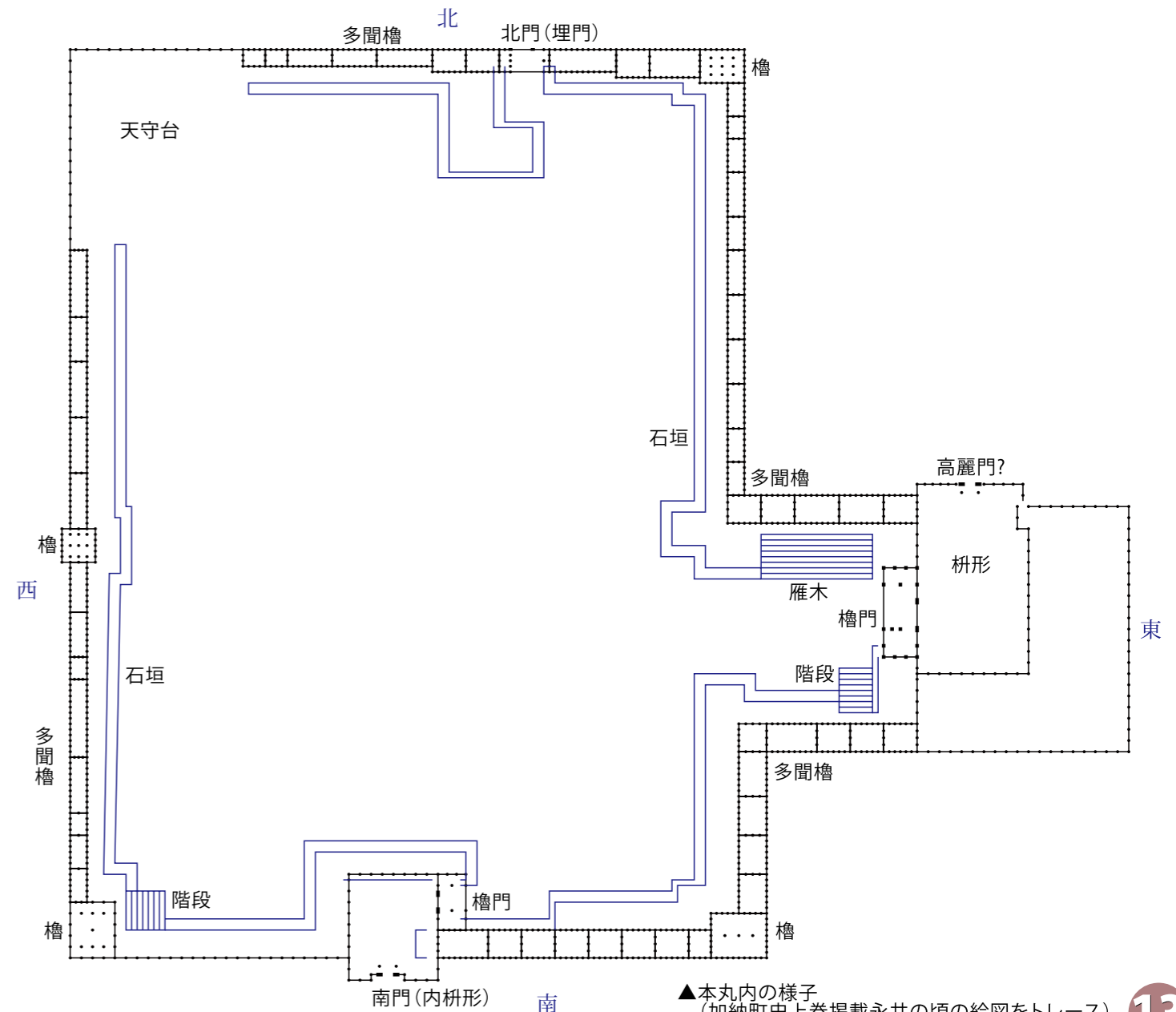
本丸大手北堀で出土したかわらしゅうせき瓦集積。本丸で使用されていた瓦が捨てられたもの。中には火災に会い、白く変色しているものがある。



本丸大手枡形内の瓦集積。枡形の外側の門(高麗門)で使われていた瓦が捨てられたもの。江戸時代最初の地面の上のっている。



南門の内枡形の土塁。現在残っていませんが、石垣1段分だけ埋まっていた。



▲本丸内の様子(加納町史上巻掲載永井の頃の絵図をトレース)

二の丸御殿と食生活

平成12年度に実施した二の丸内の発掘調査で、柱を支える礎石が12個出土し、御殿の一部が発見されました。礎石は直径40~60cmの楕円形をした川原石で、平らな面を上を設置してありました。石と石の間隔は2m、整然と並んだ3個×3個の配列と、ややずれた位置にある3個とあります。調査場所は二の丸御殿のうち、大名の私的空間である「奥」と考えられますが、細部を決定するまでには至りませんでした。



▲二の丸御殿の礎石(上空から)
写真は右が北で、右半の白い石が礎石

この調査では何層もの盛土が確認でき、御殿が幾度も建て替えられている様子が伺えます。礎石が出土した地面の下にも、さらに古い時期の地面が埋没していました。築城後間もないと見られる層からは、陶磁器の他に大量の貝・魚骨・鳥骨が出土しました。出土状況から見て、これらは食事での生ゴミと考えられます。



▲礎石を南から見た写真

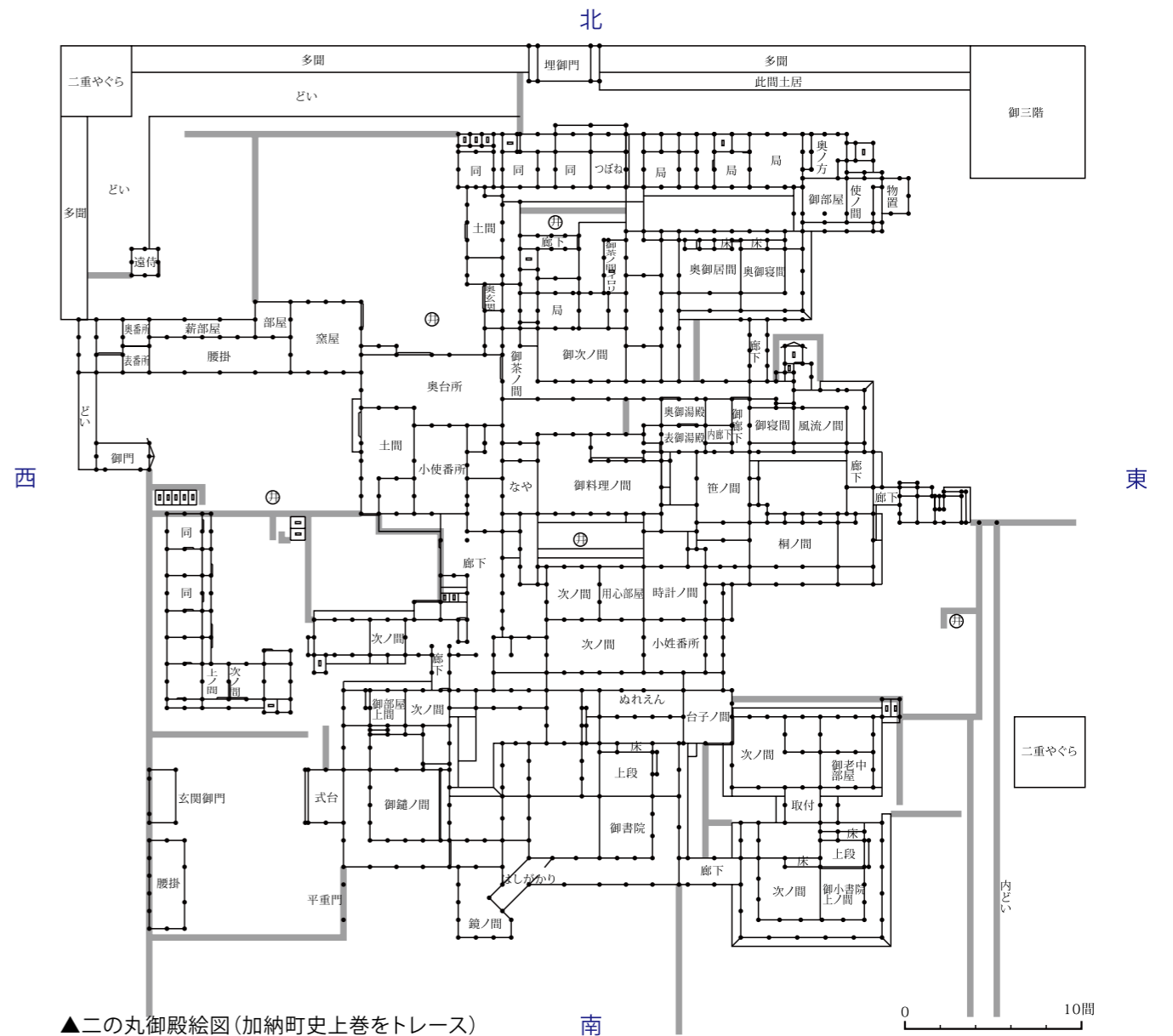
分析調査を行ったところ、貝にはハマグリ、アサリ、シジミ科、サザエ、アワビ類などがあり、大きいものを選んでいた可能性が高いようです。魚はニシン科、アユ、サケ科、コイ、トビウオ科、タラ科、ボラ科、カマス属、スズキ属、キス属、アジ類、タイ科、サバ属、カレイ科などがありました。数の割に種類が多く、多様な魚を食していたと見られます。鳥はニワトリ・シャモ類、ガン・カモ類、キジ類、ツル類などがありました。それ以外にはニホンカワウソ、ドブネズミの骨が出土しています。ドブネズミは、生ゴミを目的に来たものが自然死したか、鷹狩り用のタカの餌と考えられます。

これら貝・骨の出土場所は、二の丸御殿の「奥」にあたる場所であることから、大名の食生活の一部を表している可能性が高いと考えられます。貝・魚は大きい個体を選ばれ、また現代では考えにくいツル類やカワウソも食されていたようです。出土状況が良好であれば、発掘調査によって当時の食生活も復元することができるのです。



▲平成13年度発掘調査の様子

平成13年度発掘調査出土の漆器
漆器はケヤキの木で作った皿(蓋の可能性もあり)に黒漆が塗られています。表面には、細く線刻し、金を埋め込む「沈金」という手法で、鶴と松が描かれています。



▲二の丸御殿絵図(加納町史上巻をトレース)

出土品

加納城跡の発掘では、回数割に陶磁器の出土は少量です。本丸の調査では、原則的に明治以降の攪乱や盛土しか掘らないためでもあります。圧倒的な量を占めるのは瓦です。

下の写真は三の丸2次調査(4ページ8地点)において、まとめて出土した陶磁器類です。磁器(下左写真)は肥前(今の佐賀県)で作られたもの、陶器(下右写真)は瀬戸・美濃で作られたものがほとんどです。それ以外にも塩を入れる容器や、宴会などで使用される皿などがあります。

これら陶磁器は焼けた壁土、炭、二次被熱した瓦などとともに見つかり、火災後の片づけで捨てられたものと考えられています。現在の考古学的基準では17世紀後半頃のものとしてされており、この時期に三の丸が焼失するような火災があったようです。加納城内で一括して出土した貴重な資料です。



下の写真は本丸1次調査(4ページ1地点)で出土した陶磁器類です。かなり多量に出土し、18世紀前半までのものが大多数を占めますが、それ以降のものも混じっています。二の丸御殿で使われていた物を、目立たない裏手にあたる本丸の堀に捨てたものと考えられています。

陶磁器の産地は上の写真のものと同じですが、形や作りなどが違っており、若干新しい時期ということが出来ます。



瓦はおびただしい量の出土があります。特に建物等の建て替えの際、まとめて捨てた痕である瓦集積からは、比較的残りの良いものが多く出土します。左上の写真は、本丸大手北堀で見つかった瓦集積です。本丸に極めて近いことから、本丸内の建物を取り壊した際、捨てられたものと考えられます。右上はこの瓦集積から出土した瓦で復元したものです。先端の平瓦(軒平瓦)が白っぽいのは、火災による二次被熱のためです。

加納城から出土した軒平瓦、軒丸瓦の文様は、それぞれ70種類以上あります。屋根の破損、修復が繰り返された結果、多くの種類の軒瓦が使用されることになりました。右の写真の瓦は、加納城で最も多く出土する軒丸瓦と軒平瓦で、築城時に使用された文様と推測しています。

瓦には文字が書かれたものや、棟に載せられる鯪瓦なども出土しています。



▲築城時に葺かれたと考えられる軒瓦



▲「天下一」とスタンプされた瓦



▲「〜わらし 次郎四郎さく」とへら書された瓦

▼鯪瓦の破片

